

製品の革新と沿岸地域での交易

(QR code, Room 2)

珠洲の陶工たちは、壺、保存用の瓶、および食べ物を準備するためのすり鉢の製作を専門にしておりましたが、同時に興隆しつつある武士階層のための仏像や宗教的な品へと多様化していました。鎌倉時代（1185～1333年）には、将軍の統治のもと、権力は天皇・貴族から有力武将と武士に移りました。以前は主に朝廷のものだった仏教が、武士と一般の人々の間で人気を高めていました。仏教が田舎に広がると、武士と富農は墓を建てるようになり、仏式の火葬を行うようになりました。珠洲の陶工たちは、甕棺、骨壺、また宗教的な像を作りました。

仏像は木や石から彫るのが一般的でしたが、珠洲の陶工たちは、12世紀末から13世紀にかけて、粘土を木型に押し込むことで仏像の大量生産を始めました。これらの像は、寺を定期的に訪れるのが難しい地域の村のお堂にまつられていたと考えられています。

能登半島は、北海道と福井の間の日本海沿岸航路上にありました。重くて壊れやすい陶磁器を流通させるには、船で運ぶのが最も便利な方法でした。珠洲焼の現存する例の多くは、珠洲の遺跡から発掘されたものや、難破船から引き上げられたものです。

珠洲焼は、14 世紀までに、日本列島の 1/4 で流通するようになりました。15 世紀後半に珠洲焼は衰退し、製造は止まりました。その正確な理由は不明ですが、越前（福井県）、常滑（愛知県）、備前（岡山県）といった、他の生産中心地の生産性と流通が改善した結果、珠洲焼は市場から追い出されたのかもしれない。